

2007,2009,
2010 年

鈴木研究室夏季ゼミ合宿



2011/03/31

2010年度新聞学科 鈴木雄雅ゼミ 夏季合宿

地方メディアの実態を探る：名古屋編

■実施期間 2010年9月27日（月）～29日（水） ■訪問地 名古屋

■日程

- 9月27日（月） 12:50 中日新聞社本社玄関前集合
<http://www.chunichi.co.jp/info/map.html#map01>
13:00～ 中日新聞本社見学(約2時間程度)
社会部平岩記者*と懇談 *元北京特派員、文化部
17:00 ホテルチェックイン（名古屋栄東急イン）
19:00 夕食・懇親会① 秀島竜司君(電通名古屋)
- 9月28日（火） 8:00 朝食
11:00 NHK名古屋放送局訪問・見学
<http://www.nhk.or.jp/nagoya/nhk/access/index.html>
ニュースセンター・スタジオ
質疑応答&ふれあいミーティング
(NHK名古屋アナ杉浦友紀さん)
視聴者としてNHKへの意見を求められます
13:00 昼食
16:30 名古屋テレビ[めーてれ]訪問
<http://www.nagoyatv.com/corporate/access.html>
レクチャー ニュース情報センター 伊藤貴宣氏
17:30 ニュース生スタジオ見学「スーパーJチャンネル」
18:30 ホテルへ
19:00 夕食 懇親会② 川島葵・東海ラジオアナ/平澤祐・読売豊田
- 9月29日（水） 8:00 朝食
解散 自由行動（名古屋城見学）

※宿泊ホテル 名古屋栄東急イン <http://www.sakaetokyuin.com/access/access.html>

中日新聞 <http://www.chunichi.co.jp/>

中日新聞沿革 <http://www.chunichi.co.jp/info/enkaku.html>

NHK名古屋放送局 <http://www.nhk.or.jp/nagoya/>

杉浦友紀さん <http://www.nhk.or.jp/nagoya/nhk/ana/sugiura.html>

ふれあいミーティング <http://www.nhk.or.jp/nagoya/nhk/meeting/index.html>

名古屋テレビ（TV朝日系） <http://www.nagoyatv.com/>

【参加者名簿】(3,2年生)

A0819006*	大場 真央	新聞学科 3年生
A0819024*	坂本 香澄	新聞学科 3年生
A0819326*	村田 茜	新聞学科 3年生
A0819386	奥村 健也	新聞学科 3年生
A0819494*	古橋 侑佳	新聞学科 3年生
A0819565	東 玲央	新聞学科 3年生
A0819753*	小林 穂稀	新聞学科 3年生
A0919501	井坂 太郎	新聞学科 2年生
A0919540	Park Seulgi	新聞学科 2年生
A0919785	原口 由利恵	新聞学科 2年生

引率 上智大学(新聞学科)教授 鈴木雄雅(すずき・ゆうが)



2010年度鈴木ゼミ 夏合宿「名古屋」レポート

A0819006 大場真央

はじめに

名古屋に行ったのは今回のゼミ合宿が初めてであったが、名古屋の街に降りた時、自分の出身地の札幌と街並みがとてもよく似ているという印象を持った。街の中にある公園やタワー・平行に並んだビル群など、その類似さに驚いた。そして親近感も持った。地方のメディアに触れるということで、名古屋の文化と共に理解していきたいという気持ちで合宿に臨んだ。

中日新聞

初日の27日に訪れた中日新聞では、中日新聞の概要をまず説明していただき、その後新聞が印刷され出来上がるまでの過程を見ることが出来た。過程を見学してみて、予想以上のとても速い速度で印刷されケースにおさまっていく様子が私をはじめゼミの皆が驚いていた。また中日ドラゴンズが優勝間近ということで、その話題で中日新聞社内はもちろんのこと名古屋全体も盛り上がっているという、ローカルでホットな話題も社員の方から聞くことが出来た。

最後に、社会部の平岩記者との懇談では、北京特派員として文化部に配属されていた当時の苦労話や仕事をしていく上でのやりがいについてお聞きし、新聞記者としての心意気や仕事に対する思いなど興味深いことを知る機会になったと思う。

NHK名古屋放送局

2日目のNHK名古屋放送局では、NHK名古屋アナウンサーの杉浦友紀さんの案内でテレビ局の内部を説明していただいた。実際の放送スタジオでは緊急時の原稿が用意されていたりと放送の裏側の部分を垣間見た。1階では公開収録を行っていて地方ならではのオープンさを感じた。聞きにきているのは地元らしきお年寄りの方がほとんどであった。また、杉浦さんをはじめ3人の方との懇談では1人ずつ質問をさせていただき、現場の方たちも20代前半の若者である私たち大学生の意見を真剣に聞いてくださった。NHKの番組は大河ドラマや情報番組・ニュースなど普段からよく見ているが、その番組制作にかける想いがこの懇談を通して伝わってきた。

名古屋テレビ（めーてれ）

ニュース情報センター伊藤貴宣さんからレクチャーを受けた際に「ローカルを突き詰めていくとグローバルになる」とおっしゃっていたことに、私はなるほどと思った。また、名古屋のほうが大きな都市であるとはおもうが、昨年訪れたHTB（北海道テレビ）と比較すると、設備やセットやスタジオの造りなどは名古屋テレビの方が規模が大きく感じられた。「スーパーJチャンネル」の本番はアナウンサー・ディレクター・音声などチームワークプレーと集中力がビシビシと伝わってきて、気を抜けない緊張感が圧倒的であった。

名古屋のメディアに触れて

0819024 坂本 香澄

今回のゼミ合宿では、「地方メディアの実態を知る」ということで名古屋へ行った。3日間で様々な新聞社やテレビ局の見学や、現場で活躍する先輩方の話を聞けてとても貴重な体験となった。

1日目には、まず中日新聞社の見学。新聞が出来るまでの流れを詳しく説明してもらい、実際に新聞を印刷している現場も見せてもらった。輪転機を実際に見るのは初めてで、あまりに速くて驚いた。機械が動き出してから、あっという間に新聞が出来上がる光景にはとても感動した。

そして、見学が終わった後、中日新聞で記者をされている平岩勇司さんに話を聞くことが出来た。過去の取材の裏話が聞けて、中国特派員時代の話が特に興味深かった。

2日目には、NHKの名古屋放送局に行き、新聞学科の卒業生でアナウンサーをしている先輩に話を聞いた。実際のスタジオセットや局内の案内をしてもらい、アナウンサーの仕事の大変さを感じた。また、話を聞くなかで、NHKの公共放送局としての立場や葛藤を知ることが出来たのが良かった。若い世代に向けた番組を作りつつも、今までの視聴者を失わないようにすることはとても難しいことだと思った。私はNHKの番組をあまり観ていなかったのだが、面白そうな番組が沢山あったので、これからはもっと観るようにしよう。

午後は名古屋テレビ、通称め〜てれに見学に行き、放送業界についてのレクチャーを受けた後、生放送のニュース番組をひかえた局内を案内して頂いた。現場の人たちの働く姿は真剣そのもので、とても緊張感があった。見たこともない機材がたくさん置いてあって、とても興味深かった。実際に使っているテレビカメラを一人ひとり、持たせてくれたのだが、予想以上に重くて驚いた。

そして、見学の最後に生放送のニュース番組のスタジオ見学をさせてもらった。やはり生放送のスタジオは緊張感が凄かった。しかし、出演者はそんな素振りも見せず、完璧にこなしていて流石プロだな、と感じた。ニュース番組の見学は、なかなか出来ないことなので、とても貴重な体験をさせてもらった。

今回、私は初めてゼミ合宿に参加したが、3日間あっという間でとても楽しかった。普段では絶対に行けない場所や、会えない人に話を聞けたので、行って良かったと思っている。この合宿でメディア業界についての知識や理解を深めることが出来た。

名古屋ゼミ合宿で学んだこと—地方メディア体感—

A 0819326

村田 茜

9月27日から2泊3日の日程で行われたゼミ合宿で、私が特に面白いと感じたのはNHKの人事システムである。アナウンサー職で入社した社員がディレクターになったり、またその逆があったりというのは、さまざまな企業があるなかでも珍しいのではないだろうか。お話を聞かせてくださった杉浦友紀さんは「専門でない分野をあえて学ばせるためではないか」とおっしゃっていたが、それにしても簡単にはいかないだろう。合宿全体を通してどの見学先でも耳にした『『それしかできない人』になるのを避ける』ための対策を、どの企業でも行っているのだなと実感した。NHKに関しては、長い間「固い」「真面目」というイメージが染みついていたので、お話を聞き「本当は融通がきく会社なのだ」という新たな発見もあった。

中日新聞では、平岩勇司記者がおっしゃった「取材対象者を知るためには、その対象物の良し悪しをみななければならない」という言葉にとても共感した。先月携わった静岡県の事業仕分けで、まったく同じことを思ったからである。たとえ尊敬してやまない人やモノであっても、その悪い面をみなければ真の理解にはつながらないのだと思った。また、平岩さんは記者になってよかった点として「自分の疑問が世の中を変えるきっかけとなった」ことを挙げていたが、このお言葉を聞き、記者職に対するあこがれが強くなると同時に、広い視点をもたなければ疑問も生まれにくいことに気付かされた。

メ〜テレでは、お聞きしようと思っていた「一緒に仕事がしたい人像」を伊藤貴宣さんが先に教えてくださったので、参考にしなければと思った。特に「一方的な思い込みでない正義感を持っていること」と「複眼的な思考をもち冷静であること」というのは、両方のバランスをうまくとるには難しそうだが、それほどの高い能力がメディア人には求められているのだなと感じた。

3日間を通じ、どの方もおっしゃっていた「グローカリゼーション」という言葉が非常に印象的だった。地方メディアに従事する方々としては、ローカルなニュースが広く伝わり知られることはとてもやりがいを感じる瞬間なのだろう。名古屋は地方といってもかなり規模が大きいですが、それでも地元を根ざした報道を追い求めているのだなと感じた。地方メディアの実態はもちろん、先生のパイプを通じて多くの業界人の方々とお知り合いになることができ、とても有意義な合宿を行うことができた。

地方メディアへの理解契機に

A0819386

奥村健也

今回、合宿で中日新聞、名古屋テレビ、NHK名古屋局を見学したが、神奈川出身で地方局の番組をこれってと言って見たことがなく、遠い存在だったのでいい機会になりました。

テレビに関して言えば、地方メディアを実際に見学して、放送法（第四十四条、二）でNHKは民放と異なり、「全国向け番組のほか、地方向け番組も有するようにすること」と定められていることを事前に知ったが、今井さんらの、地方向け番組を作る・放送するという事以上に全国的な（グローバルな）視点で地方の（ローカルな）問題、ニュースを流すというような意識を実感した。杉浦さんの「地方のニュースを全中（全国中継）にもっていく力がある」「NTV『県民ショー』のような番組はNHKが本来目をつけるべきものだった」との話や、「グローカリーゼーション」の話が出るといったことから感じました。

今回のテレビ局見学では2局とも全国ネットワークの中に組み込まれたテレビ局であったので、地方独立局という存在に逆に興味を持った。その意味では中日新聞は似た存在という意味で興味深かった。中日新聞での話で、その地域での絶対的な自信を見せ、ほかの媒体もそのように言っていたが、中日新聞の強さは、県版をしっかりと入れていることだと学びました。『地方テレビ局は生き残れるか』（鈴木健二著、日本評論社、2004）が、秋田県の調査例を挙げている。県が異なり、媒体もテレビと異なるため、ただの参考にもならないかもしれないが、その中で「テレビでニュースを見るとき、一番知りたいのは、どこで起こったニュースですか。三つ挙げてください」という質問を挙げている。

回答結	秋田県全体	27.70%
	本全国	27.50%
	秋田市と雄和町周辺	18.50%
	世界全般	10.90%
	東北地方全域	10.80%
	東京及びその周辺	4.10%
	その他	0.50%

左がその結果である。その県周辺（地方）は世界全般と同格であり、その県そのもののニュースが求められている。これは中日新聞が行っていることとうまくマッチしている。中日新聞の言う「地域密着」として行っていることが強みであることがわかった。ほかのブロック紙なども調べてみたい。

名古屋の3日間で地方メディアに親しみを持ち、また、就職活動前にいい機会になった。中日新聞の平岩さんやNHK・杉浦さんら、貴重なお時間いただいた方、また、雄雅先生、ありがとうございました。

2010年度ゼミ合宿@名古屋 ～地方局のメディアの実態～

A0819494
古橋 侑佳

昨年の札幌合宿に引き続き、9月27日から28日にかけて、地方メディアの実態を知るという目的で中部地域の中核となっている名古屋の地を訪れた。中日新聞を見学し、社会部の平岩勇司記者と懇談の機会を設け、NHK名古屋放送局を訪れ、学科のOGである杉浦アナウンサーと“ふれあいミーティング”という名のもとに質疑応答を行い、名古屋テレビ（メ～テレ）では伊藤貴宣氏にレクチャーとスタジオ見学をさせて頂いた。新聞学科の学生としてアカデミックな視点で、メディアやジャーナリズムを学ぶ私たちにとって、現在第一線で働いている方々の意見や考えをうかがうことができるということ、また現場の空気や働いている姿を実際には意見できるということは、非常に貴重なことであった。

社会部の平岩氏からは北京特派員当時のとても興味深いことをうかがうことができた。中国では外国と関係する主要な団体や機関において、地理的状况にかかわらず、中国当局が盗聴するために局番を統一していたり、外国メディアが行っていることを常に監視していたりという事実が衝撃的であった。中国のメディア環境は統制されており、言論の自由が保障されている訳ではないということは、授業の中で学んでいた。実際、中国で取材経験を持つ記者の方からそのようなエピソードを聞いたことは、現在の中国とアカデミックに学ぶものを比較して、自分の知識を深めることと共に、それについて現実と机上のものを合わせて深く考えることを改めて認識させた。

NHK名古屋放送局と名古屋テレビに関しては、公共放送と民放という観点からみると地方局といえども、共通するものと異なったことのあるものがある。NHK名古屋放送局で言えば、NHKという就労の体制上移動が頻繁にある。全国に張り巡らされたネットワークを通じて、ローカルのコンテンツであっても全国中継でき、そのメッセージをより多くの人と共有しやすい。一方名古屋テレビは、大手にみられるコンテンツ制作を分業作業にせず、何役もこなすことで、それに必要な術を学び、プロとして成長できる。また、地方局が独自に冠番組を持つことは、コミュニティを狭めることができるため、その内容を限定し、より深く情報提供ができる。両者ともに、放送されるエリアの視聴者への思いや、その土地の風土、またジャーナリストとしてのプロフェッショナルさが感じられた。

メディアは様々な枠組みがある。ジャーナリズムとして、娯楽や商業的にも機能している。それぞれのメディアの在り方は多様な側面を持つものの、それらは地方メディアという限定されたコミュニティの中での影響力は大きく作用する。また、読者が記者の名前を憶えていたり、読者や視聴者から励まされたりとメディアとそこからの情報を享受する人々は非常に近い関係にある。今回の合宿では“グローバル”という言葉が印象的であった。様々な側面を持つメディアはそれぞれの中で、世界の舞台へと飛躍していく時代にはなっていると思う。しかし、その根源にあるものは、グローバルに対応するメッセージではなく、ローカルのために、ローカルを深く突き詰めたものが、結果的にグローバルに受け止められるという、地方局で活躍しているジャーナリストたちから聞いたことが、これからの地方メディアの発展が明るいものであることを実感することができた。

2010 年度ゼミ合宿を終えて

A0919785

原口 由利恵

新聞学科の授業や社会科見学を通して、一部の新聞ができるまでには多大な労力と多くの人が関わっていることを学んできただけに、新聞一部が 100 円台で手に入るものが、私はこれまで疑問だった。安価すぎるのではないかと感じていたのだ。

新聞社の資金は単純に新聞の売上高からのみでは成り立っていないが、中日新聞の朝刊発行部数 3,382,173 万部×110 円＝約 3.7 億円/日だけでも莫大な金額になることを知った。発行部数分すべてが売れるわけではないだろうが、夕刊やスポーツ紙の売り上げ、広告収入も加わることから、少なめに見積もってみても一日に億単位の売り上げがある、ということだ。そのように考えると、新聞一部が 100 円台の割に、新聞社が球団を所持できるのも頷ける気がした。

先にも述べたように、新聞ができるまでには多くの人が関わっているが、今回お会いした平岩氏との対談で最も印象的だったのは、「取材する相手も人間ができてないといけない」というお言葉だ。継続的な取材となると、記事が書かれた後の付き合いも必要だが、その記事は取材相手にとって必ずしもよいものとは限らない。そのため、たとえ不利なことを書かれたとしても継続的に付きしてくれる人であるか、この人になら、書き下ろされても仕方ないと思わせるような信頼関係を築けていないといけないということだ。

その後、NHK 名古屋放送局、名古屋テレビを見学したが、中日新聞にしても、どちらのテレビ局にしても記事や番組をつくる際に地域性を重視していることがわかった。ここまでは、視聴していれば何となくわかることだが、なぜ地域性を重視しているのか、その理由まで深く考えたことがなかった。

この疑問を解く鍵となったのが、「ローカルなものを追求するとグローバルになる」いわゆる、「グローバル」という考え方だ。グローバルとローカルを、相反するもののように考えていた私だが、そうではなく、もっと深い一歩進んだ捉え方があることを学んだ。

そして、テレビ局と新聞社とは互いにコネクションをもっていて、そこにもネットワークがある。そのネットワークを想像してみると、その幅広さと奥行きの高さに、マス・メディアの力と巨大さを感じる。

しかし、その巨大なネットワークを辿ってみると、ローカルかつ地道な取材が人びとの手により行われていて、その情報がやがてグローバルなニュースとなっている。これら一連の流れにもグローバル性を見て取ることができるのだ。

2009 年度夏季ゼミ合宿旅程表

2009/09/24

- 9月28日（月） 札幌入り（現地集合） 市内観光あり（希望者）
- 9月29日（火） 朝食後 午前中 札幌市場見学あり/小樽
14:00 HTB スタジオ(イチオシ)見学+レクチャー 夕方まで
「北海道の放送現場から」報道部長 国本 昌秀
「ニュースの現場」報道部 戸嶋 龍太郎

夜 （卒業生を囲んで）懇親会

- 9月30日（水） 朝食後
10:00～12:00 北海道新聞本社見学 編集局、資料室、NIE 担当者からレクチャー
野村六三 北海道新聞社文化部次長
終了後 共同通信札幌支社見学 編集部長 嶋田正人
昼 食 現地解散

以 上



2007年度 新聞学科 鈴木研究室 夏季合宿

9月27日(木)～29日(土) 北海道・札幌



北海道新聞社 資料室展示



北海道ゼミ合宿

A0519011 市村佳織

今回のゼミ合宿は、「地方の力」について考えさせるものであった。

1日目、早速 HTB（北海道テレビ）を訪問した。まずスタジオに入れていただき、夕方の情報番組「イチオシ！」生放送の見学。スタジオは終始和やかなムードで収録が進む。階上のコントロールルームではディレクターらがカメラの切り替えやテロップの表示を一瞬の判断の下進めていく。出演者に「カメラを意識して」と注文をつける場面もあった。

その後、HTBの番組編成に関するお話を聞く。ライバル局とのネタ争いや、スポンサーに気を配った番組構成など、普段できないテレビ局の裏側のお話をかせていただいた。放送の時間帯組を自社製作したり、系列キー局場合はテレビ朝日の番組を購入したりするということに対して、21のみを視聴して育った自分にとって感覚を覚えた。どのような番組を入れるかももち



（写真・HTB 本社正面壁にて。onちゃん）

ろん HTB が決定するのだが、北海道では今も韓流ドラマがブームのようで、韓流ドラマ買い付けの裏話もとても興味深かった。

また、事前学習で視聴した2本のドキュメンタリーについても、プロデューサーである戸島さんにお話を伺った。「心の中の国境」では、舞台は旭川に始まり、遠征を行ったアメリカ、そしてスタルヒンの出生の地ニュータギールにまで及ぶ。取材を進めていくうちに明らかになっていく新事実の構成の仕方や、散漫になりすぎぬよう削ったシーンもあるというお話が心に残った。

事前レポートでも調べたとおり、HTBは深夜バラエティ「水曜どうでしょう」を製作・大ヒットさせたテレビ局である。HTB 正面玄関入ってすぐのスペースには、水曜どうでしょうグッズやDVDが並び、全国からHTBにやって来た水どうファンからのメッセージノートも置かれていた。

「水曜どうでしょう」「イチオシ!」、事前に見た2本のドキュメンタリー、また、ゼミ合宿後に放送された「そらぷち」など、HTB制作のコンテンツはどれも地元北海道に関わりのある人物をとりあげたり、舞台にしたりという特徴がある。特に「イチオシ!」は、道内のまちを順番にめぐり、そのまちの中でおいしいお店を3件ほど紹介するといった非常にローカルなコーナーを設けている。関東キー局でもグルメコーナーはあるが、「イチオシ!」ほど地元の特化した内容は、キー局ではその放送範囲から考えても不可能だ。北海

聞くこと
たくさん聞
によって番
（HTBの
して放送し
年間キー局
も不思議な
どこから購

道テレビの、あたたかい一面を感じた場面であった。ちなみに、この日の「イチオシ！」で目玉として取り上げられていたじゃがいもスコーンを求めて、翌日札幌三越・英国展へと走ったゼミ生が数名いたとかいないとか。

2日目には北海道新聞社に向かった。北海道新聞社では NIE(Newspaper In Education) に積極的に取り組んでおり、新聞社も細部まで見学させていただいた。見学者用に特別に展示された過去の新聞や、鉛の版など貴重なものをたくさん見せていただいた。壁一面には、アポロ 11 号の月面着陸の様子や昭和天皇崩御のニュースなど、過去重大事件として一面を飾った紙面が並べられており、その迫力あるレイアウトや情報量の多さに、時代の空気までも記録として残す新聞の力を改めて実感した。特に印象的だったのは、2004 年、第 86 回全国高校野球選手権大会で、駒大苫小牧が優勝した際の記事。(写真参考) 当時、アテネオリンピックで野口みずき選手がマ



ラソンで金メダルをとり、大きなニュースが重なったためこのような見出しをつくったそうだ。私の出身地、茨城県にも過去、甲子園で優勝した高校はあったが、茨城新聞は一面にこれほど大きく取り上げなかった。北海道新聞が全国紙をしのぐほどの力を持つ地方紙であること、そしてその地元愛を感じた。また、サッカーのコンサドーレ札幌、野球の北海道日本ハムファイターズに関する記事も連日大きくとりあげており、スポーツが地域活性の要になっていることが

わかった。

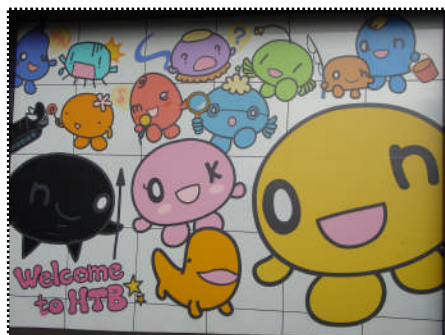
HTB、北海道新聞社ともに、私にとって初めての地方局訪問であったが、どちらも都市の局に負けない力があつた。インターネットによってテレビや新聞は下火になりつつあると言われるが、地方のテレビや新聞は、その地域に住む人が「ここは私の町だ」と潜在的に認識できる、いわゆるアイデンティティの形成に一役買っているように感じた。

今回の旅で残念だったことは、「白い恋人」が賞味期限問題に関する不祥事により販売中止になっていたこと。そして、話題のおみやげ「じゃがポックル」は、相変わらず品薄状態でひとつも購入できなかったことである。北海道のおみやげといえば「白い恋人」という方程式が崩壊してしまった今、新たな定番の位置につこうと激しいおみやげ商戦を繰り返す製菓会社の熱も感じられた。

ゼミ合宿@札幌2007

A0519021

春日裕美



9月27日から二泊三日の札幌ゼミ合宿。一応表向きはゼミ合宿だが、実際は札幌3日間食べ歩き合宿と言っても良いくらい北海道の味覚を堪能できた3日間だった。お腹いっぱい食べ続けていたので、家に帰ってからも食欲が止まらず、苦勞した。北海道新聞社と北海道テレビの見学は、堅苦しいものではなく、和やかな雰囲気だったので、いろいろ質問することができ、楽しく見学することができた。北海道テレビでは、午後のニュースの生放送中のスタジオ

を見学することができ、放送中の緊張感がこちらまで伝わってきた。北海道北海道テレビ入り口。マスコットであるキャラクター新聞では、新聞の印刷方法の変遷や、歴史的大事件の当時の新聞ラクターが大きく描かれている。見ることもでき、おもしろかった。

また、北海道新聞を見学した日の夜、上智大学出身の文化部の野村六三さんを交えての飲み会は、とても盛り上がり、楽しかった。雄雅先生の名言「結婚と就職はタイミングと相性」をしっかりと心に刻み付けて飲み会は閉幕となった。

さて、今回のゼミ合宿のメインと言うべき食とスパについてだが、まず食事について書こうと思う。食事は前述したとおり、本当に充実していた。唯一、ラーメンを除けば……。実はゼミ生の中で知っている人は少ないが、私はラーメンが苦手なのだ。あの油っぽいスープとたいして美味しくない具になぜ1000円、若しくはそれ以上払わなくてはいけないのか、本当に謎だ。何より、食べた後の胃の不快感が最悪な気分させる。札幌駅到着後、『ら〜めん共和国』という北海道津々浦々のラーメンが味わえるという所でラーメンを食べることに決まった瞬間、私の食欲は嘘のように治まってしまった。が、皆が札幌のラーメンを楽しみにしている側で、「ラーメンが嫌いです」と言えず、結局ラーメンを食べることになってしまった。お昼時であったため、どの店も混んでおり、唯一10分待ちで入れそうな店にはいったのだが、運の悪いことに、数ある店舗の内最もこってりしたスープを出す店に入ってしまった。出てきた味噌ラーメンは私の最も苦手とする濃厚なスープ。やはり味が濃くて全然おいしくない。



新味噌ラーメン。卵はおいしか

せっかくお金を払ったのだからとがんばってみるが、箸が進まない。結局、別に頼んだゆで卵と麺を少し食べて、半分以上残してしまい、お店の人に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

話をスパに移すが、今回阪急交通社の旅行のクーポンとして付いてきたのは、ホテルモントレエーデルホフ札幌のカルロピ・バリ・スパだった。どうせクーポンとして付いてく

るものだからたいしたことはないだろうと高をくくっていたが、かなり豪華なホテルの会員制スパだった。午前中に行ったためか、艶敏と私以外他にお客がおらず、貸しきり状態で2時間ほどスパを楽しむことができ、ちょっとした贅沢な時間を過ごすことができた。二人で誰もいないスパで歓喜の声をあげ、思い思いの時間を過ごした。私は3日間食べ続けて体に蓄積した余分なエネルギーが燃えつくすことを願いながらじっくり大好きなサウナに入り、艶敏はスパラウンジガーデンという札幌の町全体が見渡せるラウンジでチャーハンを幸せそうに食べながらくつろいでいた。



ホテルカルロビ・バリ・スパのスパラウンジガーデンからの眺め。スパが15階にあるので眺めが良い。

札幌までわざわざ行ったのにスパに行くのはもったいないと最初は思っていたが、本当に行ってよかったと思う。スパの後、HTBの午後のニュースで『英国物産展』の紹介がされていた際、スコーンがとても美味しそうだったので、時間がギリギリだったが急いで三越に行ってスコーンを買った。何も付けずに食べたが、とてもおいしかった。全く北海道とは関係ないが、HTBの思い出として家族へのお土産はスコーンにした。ラーメン、海鮮丼、ほっけ、じゃがバター、お刺身、ソフトクリーム、スコーンなど美味しいものをお腹いっぱい食べる ことができて幸せな三日間だった。来年の沖縄がとても楽しみだ。



北海道新聞社



海鮮丼！



三越の英国物産展の

北 国 メ デ ィ ア 紀 行

—北海道レポート—

A0419019

神谷昌宏

9月27日の札幌は、当然のように東京よりも数段寒かった。早朝東京を発って一時間弱。私は生まれて初めて北海道の土を踏んだ。

一日目は北海道テレビ(HTB)を見学。「水曜どうでしょう」で有名なテレビ朝日系列局である。正直なところ、「水曜どうでしょう」を見たことは無かったのだが、生放送番組のスタジオや局内を見学後、編成局長から貴重な地方局裏話をいくつも聞かせてもらう。やはり日中は朝日系列の番組の多くを入れる都合上、なかなか工夫の余地が見当たらないらしい。夕方の情報番組、そして深夜枠のNACKSや地元発タレントを使った番組が今、HTBの独自性を出す上で期待されているようだ。

二日目は北海道新聞社(道新)を見学。土地柄のせいだろうか、個人の人格だろうか、案内をしてくださった社員のほとんど皆さんがとても親切だった。韓国や台湾の新聞社もちろん厚遇してくださったけれども、北海道新聞は特に優しかったように感じた。そして、道新の力点はやはりNIEにあるように思った。何しろ道内での組織規模が違う。土地の広大さもあるにせよ、国内でこれほど活発な運動が見られるのは稀だろう。今後、この運動が道外に影響するかどうか、気になるところである。

さて、それはそれとして、私の個人的な力点はやはり「食」にあった。何しろ初めての北海道である。魚、蟹、じゃがいも等々。最早一種の偏見とも言っているが、「北海道は何でも美味しい」という期待は私の胸、否、胃袋を大きく膨らませていたのだ。

初日の昼食は札幌駅前の「札幌ラーメン共和国」内にあった「元祖旭川ラーメン 梅光軒」—外には長蛇の列。数量限定の特製ラーメンを頼む。一口。.....普通だ。二口目も普通。スープはやや濃い目、しかし、これといった押しも無い。どうした、北海道。お前の底力はそんなものか。

夕食は飲み屋。刺身が美味かったことは覚えている。しかし何分酒の席。たらふく飲み食いした後、ツアーサービスで近くのホテルにあったスパで一汗流すと、何か大事な記憶が飛んでいった気がしたのだった。風呂上りの北海道牛乳は最高だったけれども。

二日目、昼食のスープカレー。これが美味かった。「suage」という店名通り、素揚げにされた野菜が盛りだくさんのスープカレーは、辛味と旨味の絡み合うような絶品であった。夜の酒は当然忘れてるので省くことにする。

9月29日の飛行機の中で、私は鞆の中のじゃがいも「インカの目覚め」をどう調理するか、ただそれだけを考えていた。

2007年北海道合宿レポート

A0519024 木村和加子

9月27日から29日の3日間、北海道・札幌合宿に行ってきました。今回の合宿の主な目的は、北海道テレビと北海道新聞への見学訪問でした。個人的なもうひとつの目的は、北海道のアートに触れることでした。

初日、一回目の自由時間には、時計台の近くにある時計台ギャラリーに行ってきました。このギャラリーは、市民がスペースを借りて展示会を開いている、アットホームな雰囲気のギャラリーです。展示室は六つあり、それぞれの部屋では一週間単位で市民による展示が行われています。今回行ったときは、猫の版画を製作する鈴木なを子さんの木版画展や、スペインの古都を描く横山カズロオさんの水彩画展などが開かれていました。横山さんに話を伺うと、ギャラリーは普通の人が入りにくいようなイメージがあるが、北海道の人々は躊躇なく入ってきてくれる、ということでした。こういった、市民が気軽に出品できるギャラリーがあるのは素敵だな、と思いました。



午後は第一の目的である北海道テレビを訪問しました。緩やかな坂を上って見えてきた建物の上で、テレビ局のキャラクターである「onちゃん」が迎えてくれました。建物は2つのスタジオを内蔵しており、上智大学OBの戸島さんの案内で見学させていただきました。また、HTBの生放送番組「イチオシ！」収録中に、スタジオにいさせていただき、現場の生の雰囲気を味わうことができました。以前見たフジテレビの生放送番組の雰囲気より、柔らかいイメージの印象を受けました。その柔らかさが、地方局の売りであるのではないかな、と考えました。

上の編集室にもお邪魔させていただき、実際に間近で作業を見させてもらいました。ここでは、ディレクターの落ち着き具合、懐の大きさに感動しました。少し焦り気味になる他のスタッフを優しく励ましつつも、決めるところは決める…番組をまとめるディレクターの重要性をひしひしと感じました。その後、編成局長のお話を伺い、編成の基礎知識や裏話を教えてもらいました。編成に関して何も知らなかったので、「なるほど！」ころフタレビの怖メンタリったです。何が起こでもある」



の連続でした。何の番組が当たるか、結局のとを開けてみないとわからない、という話に、テさと面白さを感じました。戸島さんにもドキュー製作のお話を伺うことができ、非常に面白か「ある程度まで段取りを決めて、そこから先、るかわからないのがドキュメンタリーの醍醐味という言葉が印象的でした。

夜、先生のおごりでおいしい晩御飯をいただき…



次の日は、第二の目的である、北海道新聞社を訪問しました。北海道新聞社は、NIEに力を入れており、とても丁寧なレクチャーをしていただきました。地方と全国の2つの座標軸がある、というお話が印象に残りました。実際に社内を案内していただき、様々な部署を見学することができました。会社独自の校正ソフトがあるという事に驚き、「便利なシステムだなあ…！」と感心しました。訪問者の為に作られた新聞展示室



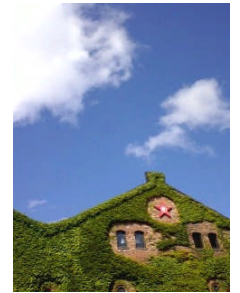
には、昔の凸版や、有名事件の記事が展示されていました。2004年の駒大苫小牧・夏の高校野球優勝と野口みずき選手・アテネオリンピック女子マラソン金メダルの記事を同時掲載するために、表紙と裏表紙で一枚になった一面記事はユニークで斬新なアイデアだと思いました。創刊当初から現代までの記事を見て、ひとつの新聞の歴史というのは、それだけでもう、面白いものであるのだな、と感じました。



午後、二回目の自由時間には、スープカレーをお腹いっぱい食べた後、札幌芸術の森に行ってきました。広い敷地を有する野外美術館は、雨上がりで人がおらず、静かにきらきりと、清らかな空気が流れていました。森の中の作品「隠された庭」がとても美しく、雨の滴が葉に落ちる音や、木々の葉が擦れあう音も作品の一部であるのだな、と思いました。北海道の自然の中にある、ということが作品をのびのびと際立たせているように感じました。

夜、上智大学OB・北海道新聞社の見学案内をしてくださった野村さんと賑やかな宴で盛り上がり…

最終日は朝、先生に市場に連れて行っていただき、海鮮丼をおいしく食しました。その後、三回目の自由時間では、サッポロファクトリーにある札幌市写真ライブラリーに行ってきました。ライブラリーでは、森や海、山など自然の写真を撮り続ける水越武氏の「大地への想い」展が開催されていました。修学旅行らしい学生で賑わっており、数々の美しい写真に皆見入っていました。大地の自然の壮大さ、呼吸、神秘性が伝わってきて、私自身ぼうっと作品の前に数分間立ち尽くしていました。



その後、サッポロファクトリーの隣にある、旧永山武四郎邸に行くと、時間の流れがゆっくりとしていて、縁側には太陽の光がぼっかり差し込んでいました。しばらくそこで、日光浴をしました。人間の一番の贅沢はきっと、太陽の光を浴びてのんびりすることなんじゃないか、と思った瞬間でした。

そんなこんなで、3日間は流れ去り、札幌と別れをつげたのでした。

合宿中お世話になった皆々さま、そして何より皆のお世話をしてくださった雄雅先生、ありがとうございました！

北海道ゼミ旅行日記

A0619021 丸山杏子

9月27～29日にかけて、鈴木ゼミ合宿が行われた。行き先は北海道。初めてのゼミ合宿、初めての北海道、おまけに1人だけ2年生と、不安にならないほうが無理な状態で参加したので、正直最後まで行くべきか止めるべきか考えあぐねていた。あまりに緊張しすぎて、まえの晩に発熱したくらいだ。

27日、腹を決めて羽田空港へ赴く。昼前に新千歳空港到着。空港から札幌まで、電車で揺られること約40分。外に出ると、とにかく寒い。残暑なんて言葉はとっくに過ぎ去ってしまったようだ。今年の夏は沖縄にも行ったのだが、一月の間にあの猛暑とこの寒さが味わえるとは。縦長い日本地図を思い出し、その気候の違いに改めて驚いた。

みそラーメンで腹ごしらえをしたら、時計台こと旧札幌農学校演武場を目指す。札幌というとすぐに思い浮かぶアレだ。日本三大がっかり観光名所などと不名誉な肩書きを持つ場所らしいが、ビルの立ち並ぶ札幌のど真ん中で、木々に囲まれ時を刻む姿はなかなか趣がある。

その後、一日目の見学のメインである北海道テレビに到着。小学校の社会科見学でNHK熊本放送局に行ったことはあるが、メディアというものを意識した上でその現場を訪ねるのはこれが初めてである。ロビーには局のマスコットキャラクターである「onちゃん」グッズや、じわじわと全国にファンを増やしていった北海道テレビ発バラエティ「水曜どうでしょう」のグッズが所狭しと並んでいた。その後、夕方のワイドショーを見学。生放



送番組の収録を見るのも人生初めてである。収録が始まる前は番組スタッフ同士楽しそうに歓談していて、和気あいあいとした雰囲気だが、オンエアまでのカウントダウンが始まると一気に張り詰めた空気が流れる。プロだ。こちらの背筋までピンと伸びる。スタジオにはいくつかのモニターが備えられ、今現在収録されている映像が流れている。それを見ているとまるでいつものようにお茶の間でテレビを見ているかのような気持ちになる。しかしモニターから目を離せば、今私がいるところは紛れもないスタジオであると再確認させられる。それを交互に繰り返していると、何だか自分が今どこにいるのか、何を見ているのか分からなくなる。エッシャーの絵に吸い込ま



れたような気分だ。

さて 2 日目、朝から北海道新聞へ赴く。簡単な説明のビデオを見た後、実際に社内を見学。紙面デザインの様子を拝見する。パソコンで、まるでパズルのように記事を組んでいく作業に舌を巻く。しかし見ている分には簡単そうだが、記事の配分、配置、その全てを考えないといけないのだ。訓練と技術が必要な仕事なのだろう。まるで職人だ。ふと、仕事場の壁やホワイトボードにお知らせが貼ってあるのに気づく。新聞の題字のようにデザインされたそれは、「〇〇さんに第二子誕生！」と伝える。職場のニュースをこんな形で伝えるとは。新聞社なりのユーモアだ。何となく和む。

ランチのカレースープを楽しんだら、午後は個人発表の準備（と言う名のフリータイム）。北海道の雑誌事情を調べるべく、札幌をうろつく。タウン誌コーナーを見ていてあることに気がついた。やたら北海道以外の土地に関する情報が多いのだ。ひょっとすると北海道の情報誌よりも力を入れているかもしれない。『〇〇ウォーカー』に至っては、東京、横浜、京都まで揃っている。地元九州では見られなかった光景に首をかしげる。推測に過ぎないのだが、北海道は他の地方都市に比べて「独自性」が薄いのではないだろうか(決して悪い意味ではなく)。そのため興味の対象が地元でなく中央に向かう、と言おうか……。計画的に作られた都市の性格なのだろうか。ただこれは札幌という地方大都市に限られた現象で他の地域にはないものかもしれないので、いまいち自信が無い。

さていよいよ 3 日目、最終日。旧道庁を見学した後、小樽に向かう。運河とガラス、モダンな倉庫……。目の裏にこれまで培われてきた小樽のイメージが浮かび、アドレナリン急上昇。鼻息荒く電車に乗り込み、石狩湾を眺めつつ小樽へと走ること 30 分、石原裕次郎の歌が響く小樽駅に降り立つ。ワクワクしながら小樽運河まで歩き——少しだけがっかりした。豪華絢爛なお土産屋、物産館、人力車の兄ちゃんなどなど。一瞬、「私はいつの間に由布院に来たんだ？」と思う。由布院、国際通り、京都清水寺周辺……。なぜ日本の観光地はみんな同じような風景になってしまうのだろう。観光客の目的がみんな同じ、「こんなところに行ったという証拠を残したい」であるからなのか。ペナントなんていうよくわからないお土産をつくる日本の観光文化はいまだ健在である。ご当地キティちゃんを作ればいいってもんじゃないだろう……。と、何だかんだ言いつつ、しっかり帆立と茹でとうもろこしに舌鼓を打つ。個人的には、南小樽駅のひなびた様子に何とも言えないさびしい旅愁を感じた（頭に流れる音楽はなぜか、ちあきなおみ『喝采』である）。

不安を抱えて参加したゼミ合宿。だが、終わってみればあつという間の 3 日間だった。仕事の現場も、イメージでしかかった観光地も、「百聞は一見に如かず」、自分で行って、見るのが大切なのだ。これに尽きる。この合宿で身につけた知識を手放さずにいきたい。もっとも、美食三昧ですっかり身になった脂肪だけは、さっさと手放したいのだが。

北海道見学

A0519052

孫 艶敏



2007年9月27日、羽田から空路2時間をかけて北海道の地上に立つようになった。北海道にくるのは初めてで、どういふところなのかわくわくだった。北海道のイメージは雪祭り、新鮮な海の幸、寒いと思った。しかし、9月末の北海道のイメージを想像つかなかった。札幌駅に着いたとき、自分の目の前には北の国の姿がやっと現れた。

今回の合宿の目的はこの都市の報道機関を見学することだ。その中の一つ、北海道新聞社は私に強く印象を与えた。その理由は北海道新聞が地方紙のイメージを超えたからだ。

地方紙といえば、地方の情報を中心にして発信するイメージがつよいが、北海道新聞は地方紙として地方の情報を中心にして地元の読者に発信するだけではない。調べるによると現在の発行部数は、朝刊約120万部、夕刊約70万部(ちなみに北海道の総世帯数は約230万)で、北海道内では新聞購読世帯のシェア70%と圧倒的な影響力を持つ。

JR北海道 札幌駅前

さらに、見学によって北海道新聞は全国的にみてブロック紙の中では中日新聞に次ぐ規模で、東京でも中央省庁の全記者クラブに加盟しほぼ常駐する他、海外9都市にも支局を持つことがわかった。そのため、北海道新聞は国際情報においても全国紙に依存せず独自の視点と独自の取材ネットワークで国際社会の情報を収集して発信する。北海道新聞社の年間売上高は750-760億円で新聞業界第6位の規模を誇る。2005年3月期決算では当期利益35億円をあげ、全国紙の毎日新聞社、産経新聞社を抜き、業界第5位だったといわれる。

そのような北海道新聞は地方紙の一般の定義を超えたではないかと思う。

北海道にある特別のところは特色の強いメディアだけではない。特有の文化にも魅了された。北海道行く前、北海道出身の知り合いから「北海道へ行ったらぜひ小樽へ行ってください」と勧められた。せっかくのち小樽へ行ってみた。札幌と初めて出会って街の造りはどこにもありそうな都会だった。その町にしかない雰囲気を感じてわかる。それに反して小樽に着いたところだとその町の特徴がはよくなった。歴史を持っている建物が残っている町だと感じた。て、まもなく小樽駅前通りを運河(右



ヤンスなので、ったとき一目だという印象っくり味わったとき、小樽はつきりわかるがいっぱいあ町を歩き始め写真)の方向

へ直進約 100mで「色内大通り」へぶつかる。

その通りは、別名「北のウォール街」と呼ばれ、かつて小樽が国際的な港湾都市として栄えていた頃に、大半の主要銀行が支店を開設していたといわれる。

旧日本銀行小樽支店は北のウォール街（色内大通り）から、その名も日銀通りで曲がったすぐの場所にある。調べるによると、東京駅の設計者である辰野金吾らによって設計され、明治 45 年(1912 年)に完成したという。屋根には 5 つのドームを配置、外壁は煉瓦にモルタルを塗り石造り風となっている。平成 15 年 5 月より、金融資料館として内部を公開している。つい数年前まで営業を行っていたらしくて、内部は日本銀行時代そのままであり、また日銀の歴史のほか、北のウォール街の再現、お札の知識、なども展示しているので、当時の雰囲気をも十分に味わうことができると思う。

もうちょっと歩くと東京で見つけられないものをおいている店が発見できる。ちょっと特別な体験ができるかもしれない。私には、東京に帰ってきても小樽で食べたアイスクリームをよく思い出す。

明治 25 年建造の旧島谷倉庫は人気店「北のアイスクリーム屋さん」として使われている。小さくて可愛い感じの倉庫のまわりは、賑わいを見せていることが多い。その店にはさまざまな変な味のアイスクリームがある。例えば、枝豆味、じゃがバター味などのきいたらおいしいのかなかと思ってしまう味がいっぱいある。私の選んだのは外見から見ると誰でも黒ゴマとバニラの味だといひそうな黒色と白色のアイスクリームだったが、実はその味はイカスミ味とうに味だ。うに味の方はほんとうにうにの味がしたので驚いた。どう作られたかとかアイスクリームを食べながら思った。イカスミの方は塩味で不思議な食感だった。その日はすごく寒かったにもかかわらず、二つを食べてしまった。

今回の北海道合宿を通して地方の報道機関に関して固定的なイメージを超えてよりわかるようになってきた。それと北海道しかできないさまざまな文化的な体験もできてよかったと思った。



北海道ゼミ合宿レポート

A0519043 尾崎 仁美

今年のゼミ合宿は北海道 2 泊 3 日の旅。昨年同様、とても充実したゼミ合宿であった。まず北海道という土地が魅力あふれる街であり、その中で学び、またゼミ員同士、先生との交流を深められたことはとてもよい思い出となったと思う。



朝8時の飛行機に乗り北海道に着くと、予想以上に寒いことに驚かされた。うかつにも夏気分に来てしまった私は、靴とタイツを買う羽目になってしまった。旅行に行くときは、基本的なことだが旅行先の気象を確認してから準備しなくてはならないと痛感した。

1日目は午後から北海道テレビを見学。あの有名な「水曜どうでしょう」を制作した北海道テレビである。ロビーにあった見学者が自由に書き込めるノートには、数多くのファンからの

番組への愛が綴られており、人気の高さをうかがわせた。中には遠方からわざわざ「水曜どうでしょうの聖地・平岸高台公園」と北海道テレビを訪れたというファンからの書き込みもいくつもあった。私はこの番組を見たことがないが、ここまで人気があるということは面白い番組に違いないと思うので、ぜひ見てみたいと思った。

北海道テレビでは情報番組「イチオ録現場にお邪魔させていただいた。地情報番組で、地域のおいしいお店やイ集しているほのぼのとした雰囲気のある。生放送の番組ということで、スタVTRや中継現場への切り替えの場面あふれる現場を体感できてとても興味編集室では「その場の状況に応じてカ分もある」というお話を聞き、テレビというのは臨機応変さが求められるのだと改めて思った。見学後も地方局ならではの番組編成の大変さ、スポンサーとの関係。他局との競争など、貴重なお話をたくさん聞くことができ色々考えさせられた。



シ！」の収域密着型のベントを特い番組であジオからなど緊張感深かった。ットする部製作の現場

2日目は札幌駅の近くにある北海道新聞を見学した。社内は柱がなく、解放的で広々と

したつくりになっていた。地方新聞局を見学するのは初めてだったので、実際の現場を見せていただきながら新しい発見がいくつもあり、とても興味深かった。地域が変わればニュースの重要性も異なり、北海道では日本ハムがいかに人々の中で重要な位置を占めているかを紙面から感じ取ることができた。また、甲子園で駒大苫小牧が優勝した時の見開きデザイン（上写真）はとてもインパクトがあり斬新で素敵だと思った。天皇崩御や月面初着陸など過去の重要な事柄が起こった時の記事も見せて頂き、とても興味深かった。天皇崩御の際はどのように表現するかを何度も社内で話し合ったそうです。

またN I Eのお話を聞き、私の通った学校でも実践されていたればよかったのになと思った。若者の新聞離れが進んでいると

言われているが、それを止めるためにもとてもよい教育システムだと思うので、もっとPR



して全国の学校に普及してほしいと思った。



午後はせっかく北海道に来たので札幌から足を伸ばして小樽観光へ。念願の海鮮丼を食べて腹ごしらえをし、小樽運河を目指して歩いた。川沿いにガラス細工のお店やオルゴールのお店がいくつも並び、優雅な気持ちに浸りながら小樽を満喫することができた。帰りの南小樽駅までの道のりもお店がたくさんあり、いかにも観光地という感じで楽しめてよかったと思う。また、1日目・2日目とも夜は居酒屋でお酒を飲みつつ親睦を深めた。さすが北海道、居酒屋といってもおいしいものばかりである。お寿

司・お刺身が出てくると歓声が上がリ、たちまち争奪戦になった。みんなの胃袋は底なしなのか、どんどん空になっていくお皿。わいわい騒ぎながら、勉強の話や学科の話、将来のことなどを語り合って(?)とても楽しいひとときを過ごした。ゼミ員や先生の意外な新しい一面も知る

こともでき、飲み会というのはいいなあと改めて思った。ぜひ学期中にも開催したいものである。

初めて行った北海道で、よく食べよく学びよく遊び、本当に充実した3日間だったと思う。北海道は素敵なおところだったので、機会があったらまた訪れたいと思った。

【協力】

北海道新聞社 野村六三さん(新聞学科卒業生)

HTB 北海道テレビ 戸島龍太郎さん(新聞学科卒業生)

行程

9月27日(木) 早朝 羽田→札幌 午後 HTB 見学

9月28日(金) 午前 北海道新聞社見学 NIE レクチャー受講 午後 ゼミ発表 夜懇親会

9月29日(土) 夕方まで自由時間、市場、札幌テレビ塔、小樽などを見学 夕刻の便で帰京

宿泊ホテル 札幌チサンホテル(2泊)

【参加者】 市村佳織、春日裕美、神谷昌宏、木村和加子、孫艶敏、丸山杏子、尾崎仁美、井上 絵里花